レオン・ブロワ『常套句注解』を読むために

辻　部　大　介

0．ルオーに導かれて

ここに紹介を企てようとしているレオン・ブロワの『常套句注解』という書物、その存在は、フランス文学愛好家のあいだではある程度知られていようし、ひとかたならぬ愛着を抱く読者もおられることだろう[1]。筆者自身は、断章形式で書かれた名著のリスト（かつて邦訳も出た、ピエール・ボンサンス監修『理想の図書館』の一章）の中でその名を知って以来、ところどころ拾い読みしては、その激越な書きぶりがもたらす不思議な感興にとまどいをおぼえつつ、とにかく一筋縄ではいかない作品であると認識するばかりだったのだが、ここへきて、腰を据えて読もうという衝迫がわき起こってきた。そのきっかけは昨（2018）年12月に北九州市立美術館でルオーの版画集『ミセレーレ』を見たことで、ブロワとルオーの交渉[2]について漠たる知識はあったものの、両者の芸術がいわば同じ霊性に発するものであることが直覚され、ブロワの本に満ち満ちている呪詛に対する、キリスト信者としていかがなものだろうかという疑念が、「ミセレーレの芸術[3]」という切り口によってあっさり解消することは快い驚きであった。人間社会の悲惨な現実（貧困、貪欲、搾取、等々）を仮借なく描き出すことが神のあわれみを乞う祈りと一体になっているとき、そうした表現活動が真正な信仰に根ざすものであることを疑う必要はもはやないのだった。

こうした関心のもと、筆者はおもむろに『常套句注解』の日本語訳に着手した。訳すことで、原文のより正確な理解に近づくのみならず、たぐいまれなフランス語の使い手と評されるブロワの文章をすみずみまで賞玩できることを期待したのだったが、この期待は、訳の巧拙はさておき、これまでのところ裏切られてはいない。以下に読まれるのは、これまでに曲がりなりにも訳し終えた、全部で一八三（ただしこれは後述する「正編」のみの章数）あるうちの約三十章（ブロワの言い方では「パラグラフ」）分の翻訳である。ブロワの数多い著作のなかでも、とりわけ広く読まれてきたというこの作品に、少なくとも現在まで邦訳が与えられていないという事実は、いかなる意味でもレオン・ブロワ研究の専門家ではない人間がこうして訳稿を公けにすることをいくらかは正当化してくれるだろう。ただ、全体の六分の一に満たない抄訳を無雑作に並べるのではあまりに芸がない。作品の全体像を示すことはできないにせよ、書物全体を見通す視点に立って一定の秩序のもとに各パラグラフを配列し、通読することで『常套句注解』がどのような形式上、内容上の特徴をそなえているのか把握できるようにすれば、より効果的にこの本の面白さを伝えることになるのではないか。いささか大上段に構えた「『常套句注解』を読むために」という標題は、およそこの程度の意味にとっていただきたい。ただし筆者の主たる企図はあくまで、ブロワの文章じたいをフランス語に通じない読者に知ってもらい、何らかの興趣をそこから受けとってもらうことにある。

以下の叙述において、『常套句注解』からの引用は、Léon Bloy, *Exégèse des Lieux Communs*, Paris, Société du Mercure de France, 1902.（フランス国立図書館が運営する電子図書館 gallica.bnf.fr よりダウンロード）を底本として、当該パラグラフの全体を訳出する。原文において、1）大文字で始められている普通名詞は、太字で表記する。2）イタリックによる強調を施された語には傍点を付す。3）大文字で強調された語は、ゴシック体で表記する。

各パラグラフの標題となっている常套句は、原文を添えつつまずは直訳し、必要に応じ人口に膾炙したことわざへの言い換えやその言い回しの含意するところをカッコに入れて付記する。

訳注はアスタリスク（*）で示す箇所に付け、パラグラフ末尾に記す。訳者による補足は〔　〕に入れて訳文中に挿入する。訳注の作成、また本文の解釈にさいして、唯一の批評校訂版（*Œuvres de Léon Bloy*, VIII, *Exégèse*

---

[1] 浩瀚な『世紀末のキリスト』（国書刊行会、2002年）の一章を『常套句注解』の分析にあてた江島泰子氏は明らかにその一人である。

[2] この点については、Gilles de Beaupte, «George[*sic*] Rouault, le Léon Bloy de la peinture», *Revue Catholique Internationale. Communio*, XXXIX/4, 2014（http://www.academia.edu/11284047/George_Rouault_L%C3%A9on_Bloy_de_la_peinture）にくわしい。

[3] Alain et Arlette Michel, *La Littérature française et la connaissance de Dieu (1800-2000)*, Le Cerf/Ad Solem, 2008; volume III, septième partie, chapitre V : « Bloy : la colère, le *Miserere*, la tendresse», pp.595-639.

des lieux communs. Edition établie par Jacques Petit, Mercure de France, 1983）の編者による注を随時参照したが、その旨をいちいち断ることはしない。

『常套句注解』は1913年に続編（Nouvelle Série）が刊行され、正編・続編を合わせて一書とみなすのが通例であるが、本稿では正編のみをとりあげる。原著が十余年をへだてて世に出た、そのリズムにしたがい、正編を味わいつくした後で続編にとりかかってもけっして遅くはないだろうと考えるからである。

なお、書名である『Exégèse des lieux communs』そのものの日本における訳は、かならずしも一定していない。この点について一家言持つわけではない筆者は、『集英社世界文学大事典』（項目「ブロワ」の執筆者は渡辺義愛氏）の表記にならって『常套句注解』を採用したことをお断りしておく。

1．常套句の使用場面

この書物を手にとってただちに目にはいるのは、各パラグラフの標題として、そのいくつかは誰しも見おぼえのある、ことわざのたぐいが並んでいることだ。「時は金なり」、「すべての道はローマに通ず」、「塵も積もれば山となる」……。これらの言い回しが「常套句」と呼ばれ、各パラグラフの本文は、そのそれぞれに対する「注解」である。これを集めたのがすなわち『常套句注解』という本なのだと、容易に見当がつく。

だが本文を読み進めていくと、「注解」（exégèse）の語にふさわしく、著者がその句の意味、その句にひそむ思考を解説したものもあるが、作家の日常におけるその句との遭遇体験を語ったもの、あるいは、事実と虚構がないまぜとなった一種の寓話（そのおのおのを独立した短編小説として読むこともできる）も少なからず見出され、最初の予想が裏切られることになる[4]。

いずれにせよ、「常套句」（lieux communs）の存在がこの本の出発点であることは疑いをいれないが、十九世紀半ばから二十世紀初頭にかけてのフランスの言語生活において、ブロワの言を信ずるなら、これら常套句が人々の口にのぼる頻度は、現在われわれが見聞きするよりもはるかに高かったとおぼしい。なにしろ、

真正の**ブルジョワ**、すなわち、この語の現代的かつ可能なかぎり一般的な意味における、思考能力をいささかも用いることをせず、何事かを理解する必要をただの一日も求められたことなしに生きている、あるいは生きているように見える人間、正真正銘、議論の余地なき**ブルジョワ**は、その言語活動において、ごく少数の定型表現を出ることはない。

彼がそれで事足れりとする世襲の言い回しのレパートリーは極度にせまく、その数二、三百を超えはしない。（序言、原著 p. 7 - 8）

というのだから。「常套句」の語が、「ブルジョワ」の言語活動をあまねく覆っている「少数の定型表現」と同義であることもまた、上の引用から明らかであろう。

では、具体的に、誰が、どのような場面で、どのようにこれらの句を使用していたのか。その実例を二、三、作中から拾いあげてみよう。

私がわが洗濯屋のアラリック夫人に、上の娘四人にさせたようには末娘には売春させないほうがいいと勧めるとき、あるいはわが家主のデュベゼ氏に、おそるおそる、幼い子供たちに死刑を宣告することが社会の平衡のために不可欠だとは考えなかった聖人の例にならってはと提案するとき、そしてこの立派な人たちが私にこう答えるとき――私たちはあなたと同じだけ信仰心を持っておりますよ、でも神はそこまで求めていない……、私は認めないわけにはいかない、こうつけ加えないだけ彼らは親切なのだと――「それどころか！」だが明らかに、必然的に、それが彼らの考えの根底なのだ。（「I　神はそこまで求めていない！」[5]）

CXI

小さな流れが大河をなす（＝塵も積もれば山となる）。

Les petits ruisseaux font les grandes rivières.

かく語る、貧者の小銭を手に入れるわが小間物屋は。かく語る、つましく暮らす人々の貯えをかっさらう金融業者は。かく語る、ボーア人の幼い子供たちの血が流れるのを見るチェンバレン*は。そして三者は皆、正確に同じことを述べている。

*ジョゼフ・チェンバレン（1836-1914）。第２次ボーア戦争（1899-1902）時のイギリス植民地大臣。

LXX

「アナタハ何処ニ行クノカ？」

≪Quo vadis?≫

[4] 文学のジャンルという観点からみると、『常套句注解』は分類不可能な作品というほかあるまい。ちなみに、手元のフランス文学年表（Beaumarchais et Couty, *Chronologie de la littérature française*, PUF, 1991）がこの作品を「エッセー」（essai）ではなく「架空の物語」（récit de fiction）に分類しているのは、おそらく誤記ではない。

[5] このパラグラフの全訳は後段に掲げる。

この文学的**常套句**をここで急ぎ挿入しよう。明日にはもう存在しないだろうが、ここ何ヶ月もすこぶる猛威をふるっている*ものだ。おお！　あの愚劣な本についてここで語るつもりはない。その成功じたいゆえにかくも厳しく断罪されている本、カトリックとプロテスタントがこぞってこれをほめたたえているが、これは、知性の観点から言って、恥辱の中の恥辱だ。司祭が説教でこれを引用することさえあった！……

私はただある逸話を物語りたかったのだ。先日、ラニーの駅で、二人の聖職者、私としては知的なるモー司教区に属していると思いたい二人が、私の前で急ぐ様子を見せていた。その一人、より急いでいる方が、とつぜん、男子便所に突進した。――クォ・ヴァディス？　とその同業者が叫んだ。返事は聞き逃したが、もとより知ったことではなかった。

*ポーランドの作家ヘンリク・シェンキェヴィチの小説『クォ・ヴァディス』（1896年刊）の最初の仏訳は1900年に刊行された。

現代日本の読者には、この本で注解をほどこされるおのおのの常套句がじっさいに使用する場面に接する機会など、ほとんどありえない。われわれにとっては、この『注解』を読むことが、事実上、個々の常套句そのものに初めて接する機会でもある[6]。このあと引用するものを含め、どのパラグラフも、多かれ少なかれ、当該の常套句の現実の場面における使用の例示というこの機能を帯びたものとして、われわれの前に立ち現れてくるのである。

2．注解の二つの型：（1）たとえ話

ブロワが本書で数々の常套句にほどこす注解を、その形式の面から、二つに大別することが許されよう。第一のグループは物語（フランス語でいえば récit）の特性をそなえるもので、さきに「作家の〔…〕遭遇体験を語ったもの」、「独立した短編小説としても読める」「一種の寓話」と表現した、一連のパラグラフがこれにあたる。その最初の例が「VI　だれも完全ではない」で、ここでは、まぎれもない短編小説集である『薄気味わるい話』に収められた一編が、標題ともども、『常套句注解』のパラグラフとしてそっくりそのまま転用されている。

VI
だれも完全ではない。
On n'est pas parfait.

〔本文、略[7]〕

〔原注〕ここに読まれた心打つ物語は、残念ながらまったくの初出ではない。1894年ダンチュより刊行の、私の『薄気味わるい話*』に収められたものだ。だがこの本の不成功といったら、ほとんど人に知られず、私の削り屑にいたるまで集めずにはおかない数人の猛者を除けば誰一人読んだことはないと確信することができる。それに、これだけの出来のものをあえてやり直す理由は見当たらないし、これよりも明快などんな言い換えが私に書けたというのだろうか。

*田辺保訳、国書刊行会、1989年（「バベルの図書館13」）。「だれも完全ではない」は同書153-162ページに収録。

このグループに属する物語を、以下に三編掲げよう。「薄気味わるい」（原語は désobligeant、「人を不愉快にする」の意）物語へのブロワの志向は、ここでも遺憾なく発揮されている。ただし二番目のパラグラフ（「CV　太陽はみんなの上に輝く」）の前半は物語ではなく、後半の回想の部分に（ここでは自伝的な）物語の要素が含まれている（それゆえ、ここで提唱している二分法はあくまで大まかなものにすぎない）。

CXLVIII
私は心静かに眠りたい。
Je veux dormir tranquille.

これが女家主の最後の言葉だった。私の闘いの時はもう過ぎ去りました。私の歳では、心静かに眠る必要があるんです。私には、たしかな借家人と、しっかりした保証が必要なんです。

――ごもっともです、と、人間を観察する時間に恵まれてきた訪問者は答えた、私の一存でよければ、さあお眠りなさい。そして彼は立ち去った。

ムートン夫人は、寒いときには手持ちの金で暖をとるという、戦慄すべき老女であった。たいそうな金持ちだと言われていたが、その吝嗇ぶりは、小ブルジョワの巣

[6] フランスで刊行されているあることわざ辞典（Dournon, *Le Dictionnaire des proverbes et dictions de France*, Hachette, 1986）が、コーパスの一つにブロワの本書を採用していることから、ブロワがあげる常套句のうちのあるものは、フランス人にとっても、そう頻繁に接するものではないと推定される。

[7] 田辺保による既訳を参照されたい。殺人により生計を立てている男が娼婦と相愛の仲となり二人して幸福な未来を思い描くが、些細な躓きから破滅する顛末が物語られている。

食う非道なこの郊外においてすら、一個の驚異であった。

亡夫ムートンは、自ら考案した栄養剤入り牛乳の開発で、思うさま儲けをあげた。これは幼い子供たちの健康をむしばむことにかけて並ぶもののない製品だったが。早々に妻の情愛から引き離され、彼女を待つべく、非凡な醜悪さをもった一霊廟におもむいた。私が身ぶるいとともに読んだのはそこでのことだ、変てこりんな入り口の上に、信じがたくも福音書から引かれた、あの字句を——叩きなさい、そうすれば開かれる*……。

この字句が未亡人の家の戸口に掲げられたとしたら、場違いなものとなったことであろう。何度も呼び鈴をかき鳴らした末に、ようやく狭い小窓がのろのろと開かれ、その枠の中に、幻想的な事物が姿を現すのだった。老女のおぞましい顔のかたわらに、両前足を女主人の両肩にあずけた巨大なデーン犬の、獰猛な口。すると彼女が、憎悪と恐怖とがこもった憲兵の声で、不意の客に呼ばわる。客が貧乏人なら、小窓は呪いの言葉とともに乱暴に閉められた。未来の借家人の資格となんらかの身元保証なしには、敷居をまたぐことはかなわなかった。その場合、客はムートン夫人とその番犬に伴われて中庭と一区画の庭園を横切り、不吉な外観の離れにいたるのである。

この離れは女家主の煩悶の種だった。利用する術をどうやっても見いだせず、価値がないというそのことが彼女を絶望させた。そのいっぽうで、ここに借家人を住まわせる決心は、どんな保証があったとしても、なおのことつかなかった。ことは彼女にとって、貞女が愛人を選ぶがごとき一大事だった。いまだかつて決断を下すことができずにいた。

実のところ彼女は、こんな近くに他人を置くことをひどく恐れていたのである。彼女は、金属をあがめ、恍惚としてこれに口づけし、キリスト教徒が聖体の秘跡において彼の神を食べるようにこれを食べることができないことに苦しみをおぼえる、古典的な、ほんもののけちであった。晩には、十五分かけてドアというドアに差し錠と南京錠をかけてまわり、隅々まで犬といっしょに見回ったあとでなければ床につかないという噂だった。

こうした用心はいかにも破局を呼び求めるものだから、ムートン夫人が自宅で刺し殺され、首が切り落とされかかった状態であるのが見つかったと知っても、誰も驚きはしなかった。近隣の人々は彼女の突飛な奇癖に慣らされていたし、人間と名のつく者で彼女の家に足を踏み入れることを許された者はいなかったので、殺人が露見したのはずっとあと、屍肉がようやく臭いを放ちはじめてからのことだった。彼女は真っ暗な一室で、番犬のそばで床に横たわっているのを発見された。両者ともに、四分の三がた腐敗していた。

金は残りなく移管ずみで、殺人者は、かならずや芸術家にちがいなく、テーブルの上に一枚の美しい透かし入り用箋を残していた。そこには、まことにしっかりした手跡で書かれた、名高いルフランの次の一節を読むことができた。

眠れよ眠れ、私の美しいひと
眠れよ、眠れいつまでも

*『マタイによる福音書』VII, 7、『ルカによる福音書』XI, 9。

CV
太陽はみんなのために輝く。
Le Soleil luit pour tout le monde.

程度の差はあれ、言うまでもなく。太陽がグリーンランド人とスンダ列島の住民とに対し同じだけ輝くことはないのはたしかなことだ。この天体の光線が目暗よりも目明にとってよりまばゆいということにも議論の余地はない。

この**常套句**は、遺憾ながら指摘せねばならないが、いささか正確さを欠いている。ここまで言及してきた他のほとんどにあった、見栄えのする身なりも押し出しのよい風采も、これにはそなわっていない。この句は私には——無礼をお目こぼしいただきたいが——靴直しの出に見えるのだ、それが寓意として表しているつもりでいる、かの名高き**人権**と同様に。読者がこれを耳にするときには、傍らにいる立派な共和国国民が、読者を攪乱してその場所に座を占めようともくろんでいるのだと確信してくれてさしつかえない。おなじみの財産接収の標語——そこをどいてくれ、俺が座るんだから——と同義。ただ、ここで太陽にどんな関わりがあるのかがわからない。

だが**常套句**の神秘をご覧あれ。ほぼ十年来というもの、私はこれを耳にするたび一種の恐慌をおぼえずにはいられない。と同時に、高利貸しで、かつホメロスのごとく盲目でもある一人物が目に浮かぶのだ。彼の汚い両手は一ダースもの眼と同じだけの働きをし、彼は並ぶ者のないすばしこさ、たくみさ、確実さ、能力でもって、人から金を巻きあげていた。

なぜかわからないが、彼はこの常套句をことのほか愛で、ものを言うたびに繰り返したものだ。想像するに、この句に魔法の力がそなわっていると思っていたのだろう。この暗闇の同伴者が光輝ある**太陽**について語り、白い瞳でこちらを見つめるかのように見える、その顔は、確言するが、突然の恐怖を見舞う代物であった。

LI
正直者の鑑。
La crème des honnêtes gens.

エドゥアールは七十五歳でロザリーは六十五歳だった。しかし彼らの良心はじつに曇りのないものだったので、人々は彼らが若いと思っていた。「あの人たちは誰にも何の借りもない」、彼らは「誰にも迷惑をかけたことがない」、だから「自分を責めるべき点がなにひとつない」。人々は彼らについて言った、掛け値なしに、正直者の鑑であると。これは要するに、究極のほめ言葉だ。

エドゥアールはその出自を隠していた、ナイル川がその源を隠しているように。ただ、家具つきホテルの使用人、次いで経営者だったことだけ明かしていた、それがいつ頃、どの界隈でのことかは伏せたままで。こうした過去の名残りとして、彼には、息切れした気立てのよさ、喘息ぎみの人懐っこさ、それに、善意の人が、人のお役に立ち、みんなのためにわが身を捧げようとて、もはや体がいうことをきかない、という時の、あの情けなげな哀傷のたぐいがあった。

ある種の卑猥な言辞を発するさい、聞き手がその微妙な味わいを感得できるようにと彼がきまってしてみせる目配せは、その年老いた顔の皮膚の下、側面部を下から上に向かう、説明しようのないカエルの動きをともなっていた。さらに、これらとともに発せられる、カタルに起因する小歌が、ムッシュー・エドゥアールと呼ばれるのを聞くのを好むこの正直者の外貌を補完していた。

ロザリーあるいはマダム・エドゥアールは、およそ一世代前、ある侯爵夫人の小間使いをしていた。そうですあなた（マ・シェル）、ほんものの侯爵夫人ですとも。やんぬるかな！よきものすべてがそうであるように、すでに世にないのであるが。第二帝政の最新流行と、おそらくはいくばくかの五フラン銀貨とを彼女に遺して。これが、四半世紀にわたって入念にくすねたもうけに加わることで、四十五歳にして彼女は、まずは申し分のない結婚相手となったのである。というのも、幸運なるエドゥアールが彼女をめとったのがこの歳のときだったからで。彼はその抜け目のない反芻動物の顔立ちでもって、彼女の心をみごと射とめたのである。

極度にものものしく、諸国民の叡智が破裂せんばかりに詰まった彼女は、いにしえのアンリ四世の愛妾が王政の終焉を生き延びたかのごとくであった。彼女はまた、侯爵夫人から驚くべき風儀を上から下まで受け継いでおり、そのため彼女を俗人と見まがうことはありえず、夫妻宅に入るのに上る四層の石段は、明らかに彼女の壮麗な物腰を誇示するためにしつらえられていた。

ムッシュー・エドゥアールの以前の家具つきホテルが、この貴婦人の所有するものだったのか、あるいは彼らの結婚前の一挿話だったのか、いまだ私の知るところではない。だが、かりに前者だったとして、彼女の存在が、日々の業務に言うところの薬味を添えて、たらいとサラダボウルの単調な行ったり来たりを貴族特有の叙情性で飾ったことはたしかだ。

ともに自然を愛した二人は、やがて城塞跡を少し越えたところに退去した、郊外によくある墓地のひとつを横切る、日に焼けたアッピア街道もどき沿いに。もともとちっぽけな一軒家を四分割し、自分たちは身を寄せ合い、南京虫のように這いつくばることで、借家人たちを置くことができ、こうして積年の夢をかなえたのである。

だが、悲しいかな！　ピラミッドの頂上より高く登ることは誰にも許されていない。そこに至れば、あとは降りることしかできない。エドゥアールとロザリーは、悪い借家人に行き当たってしまった……。

誰もが知るとおり、悪い借家人とは、家賃のうちの一回をきちんと払わない者のことである、たとえそれまで何百回と家賃を払い、三十回、あるいは四十回にわたって祖国を救ったのだったとしても。ラテン文法もまた、アリスティデスは悪い借家人であったとほのめかしてはいまいか、彼が貧困のうちに死んだがゆえに？

かいつまんで言えば、ムッシュー・エドゥアールは、もう何年も前から、彼の家のいちばん上等な部分を、一人の詩人に貸していたのだ。読者がたしかに読まれたとおり、詩人にだ。ただ、彼は騙されたのだ、憎むべきやり方で。この詩人は自分は書く仕事をしていると言い、当然ながら、敬意というものがぐっしょりと浸み込んだエドゥアール爺さんは、文字を書く職業についている男性、どこかの事務所の発送係なりを相手にしているものと思いこんだ。その思いこみはまことに激しく、この自称能書家の名が何冊もの本に刻まれているのを目にし、いくつもの新聞記事の中で彼が名前を聞いたこともないごろつきだの自堕落な低脳だのと呼ばれている――このことは、才能の証印にほかならないが――のを読んでさえ、目を開くことができなかった！

それでも、困窮が突如あらわになり、次の家賃が払われない可能性が浮上すると、目のうろこが落ちることになった。これは彼にとって苛烈な一撃だった。この立派な人物はさっそく抗議の声をあげ、それは借家人の妻が重篤な病にかかり無辺の安息を必要としていることによって、激烈さを増した。なるほど、まだ借りを作られちゃいないが、そうなるのは目に見えてる。自分は誰よりも世話好きな人間ではあるが、いっぱい食わされる連中とは人種がちがう、等々。このブルジョワの鑑は、妻からやむなく尻を叩かれ、支払いを滞らせられるという恐怖だけで悪魔憑きのようになり、のどを掻き切られる子豚みたいにわめくのであった。

さて、以下のことがらが生じた、私の目の前で、まさしくこのとおりに。病人は、この修羅場に打ちのめされ

ておそろしい譫妄に陥り、回復は望めないように思われた。幾日も幾夜も、彼女はこの老人と老女とが、人間たちを虐殺し、その肉を飲食店や肉屋に卸すのを見たのである。それは、とだえることのない、細部までありありとした、途方もない強度と執拗さをともなう強迫観念であった。人はこの家主たちが霊的に流す血のしぶきを浴びて、吐き気をもよおし、怖気を総身に味わった。

私はその後、この病人が、洞察力のある人々以上に慧眼で、この悪霊の奉仕者たちの過去を、現実に、世界を包んでいる広大無辺のネガフィルムの中に**見た**のだということを理解した。ただ、私には説明も形容もできない、けれども確実であること稲妻のごときある移し替えの結果、彼女は見たのだ、身の毛もよだつ思考と感情とが、その真の形相のもとに、客観的に現実化するのを。

彼女は見たのだ、涙の水が血に変わったのを！

エドゥアールとロザリーは、首尾よく詩人を厄介払いした。一サンチームも失わず、引っ越しのさい、いくつかの物品を盗む才覚さえ発揮した。天が彼らを愛さないということがあろうか？　司祭との関係は良好で、司祭は彼らを模範として引く。なにより彼らは誰にも何の借りもない、神の中にいる三つのペルソナにすらも！

続いて、上のパラグラフに登場した「詩人」（すなわちブロワ自身）とそのかつての家主とのあいだに生じた、別の事件の顛末——。

CXXX

どんな宗教にもよいところがある。

Il y a du bon dans toutes les religions.

「親愛なる友よ、今晩貴君の助けをかりたい。ひょっとすると朝までかかるかもしれない。誰かを殴り倒すことさえありうる。大真面目で、しかもまずとお目にかからない話だ。一人の領主さま、ほかでもない僕の家主なんだが、そいつを捕まえる話だと思ってくれたまえ。おんみずから僕という借家人に対し空巣をはたらいているという猛烈な嫌疑がかかっている。わかってくれるね、この機会から望みうる利益をそっくりあげるために、僕には証人が必要なんだ。だから来てくれ、だがあまり遅くならないうちに。援軍が送られたと気づかれるわけにはいかない。」

今から数年前、私がこの手紙を書いていた頃、私は城塞跡近くのぽつんとした離れに住んでおり、じっさいに、親愛なる隣人にして家主である人物が、夜半私の倉庫に忍び入ってワインをくすね石炭を運び出しているとの確信を抱いていた。この家主とは、上で「正直者の鑑」を扱ったさいに描出を試みた、エドゥアール爺さんその人である。その顔にあらゆる卑劣さとあらゆる不正が表れていたのは事実だ。

私の計画は単純なること神のごときものだった。彼の気をそそるような買い置きの品をいくつか、これ見よがしに取り寄せたうえで、私の倉庫の扉は庭に面しているので、錠前に彼を招くかのように鍵を挿したままにしておいた。彼が敷居をまたぐや、盛大な音を立てて転ばずにはいられないよう、手筈を整えた。そのとき駆けつければ、彼を閉じ込めるのにじゅうぶん間に合うと踏んだ。そうなってしまえば彼は私の思いのまま、警察署長を呼んで軽罪裁判所にかけてもらうと脅し、いともたやすく、賠償金をたんまり、そればかりか家賃数回分の正規の領収証を引き出すことができるだろう。屈強な若者で、いとも鋭敏な巡礼でもあるわが友人の協力が、このたくらみの成功を議論の余地なく保証していた。

結論からいえば、策謀はまったくの不発に終わった。爺さんはひどく遅い時刻に現れ、われわれはうとうとし、気落ちしてもいた。転ぶ音で目を覚ましたものの、信じがたい敏捷さに裏をかかれ、逃げ去る姿は見たが証拠となる物は影ひとつ残されていないという屈辱をなめることになった。最後にわれわれの一方が当てずっぽうに投げた棍棒も、腰の下あたりをかすめただけだった。

——で！　エドゥアールさん、と数時間の後、わが友人は彼にたずねた、空巣の調子はどうです？　エドゥアール爺さんは、必要なときには聾になる術を心得ていたものだが、この機をとらえて、次の比類のない返答をなしたのであった。

——おお！　お若い方、どんな宗教にもよいところがありますぞ！

これに先立つことしばし、〔ユダヤ教の〕大祭司ザドック・カーン〔1839－1905〕が、私の本の一冊について、この讃嘆すべき**常套句**を用いたことがある。馬鹿と悪人のための聖ヨハネによる福音書冒頭とおぼしきこの句を。

このように注解の形式として用いられている物語を、ブロワはある箇所で「たとえ話」（parabole）と呼んでいる。じっさい、まったくの作り話なのか、あるいはじっさいにあったことを踏まえているのか、自分自身の体験として語っている場合でも、どこまでが事実なのか、誇張なり空想なりが混じっていないのか、にわかには判じがたい、この種の物語を呼ぶのには、この名辞がいかにもふさわしい。

XIII

私には私の法がある。

J'ai la loi pour moi.

それは昔ながらのキリスト教徒の一家だった。父親は、申し分のない働き手にしてまことに実直な男であり、給金をきちんと家にもたらしていた。母親は、気丈そのものに家事をこなした。子供たちのいちばん上は十四歳の凛々しい男の子で、徒弟奉公を始めたところ、下に二人の女の子がおり、姉の方は初聖体の準備中で、修道女たちの学校に通っていた。このうえない純朴さをもった謙遜な人々で、聖なる者となることを願っていた。彼らの善意にピンの頭が一つ投げ込まれたとて、それが地面に落ちることはなかっただろう。

彼らはともに祈った、毎朝、毎晩。揃ってミサに出かけた、日曜ごと、祭日ごと、さらにはできるかぎり頻繁に、週の初めのミサにと。たびたび、**殉教者**の物語やその他の、世にまれな生命の糧となる本を読んだ。敬虔で、悪趣味で、憐れみをさそう幾枚かの図像が壁にかかっていた。五百もの石版の下で押しひしがれた「小椅子の聖母」、粗野なステンドグラス職人が彩色したグイド・レーニの「エッケ・ホモ」、まずまず悪くない「ゴルゴタ」、縁日で求めた静謐さを欠いた「聖家族」。

しかしなにより敬意と尊崇の対象だったのは、レオ十三世〔教皇在位1878-1903〕の名前のはいった馬のごとき肖像だった。このむごいカリカチュアが、貧しい彼らにとっては、**神**の**子**のではないにしても、その**代理人**の現存そのものだったのだ。傍らにバラ色の常夜灯を吊るして灯りを絶やさず、その前を通るときにはかならず祈りを一つとなえるきまりだった。

これほど敬虔なキリスト教徒たちを人は見たことがない。彼らの**教皇**——彼らから見ると、すべての父たちの**父**——への崇拝は、他に類を見ない、まことに素朴で、ほとんど厳粛なものだった。**祭司の長**〔ローマ教皇〕をごく些細な心配事や罪のない侮辱から免れさせるためなら、彼らはこの世における生でも、永遠の安息のうちの数世紀でも、与えられるかぎりのすべてをさし出したことだろう。

不幸が彼らを襲い、彼らは呪われた者たちのごとく打ち捨てられた。父親は圧延機に巻きこまれ、その場に居合わせた雇用主はなんら補償の手立てを講じなかった。未知の家主に雇われた管理人が、強制退去の手続きを遂行し、家具什器類も差し押さえた、例の**聖ペトロの後継者**の図像にいたるまで。母親の方は、心痛と過労で死んだ。そして、若者は、四年後に出会ってみると、この世紀に審判を下し、妹たちの女衒となっていた。

彼は、その時には知っていた、合法的に彼らを追い出すことで彼らの難破の総仕上げをした家主が、ペッチ〔レオ十三世の本名〕という名の外国人で、ローマの説教壇に座を占めているということを。アンティオキアの説教壇のことは何も言わずにおこう、いまは異教徒たちの手に落ちているので、そこでイエスの弟子たちがはじめてキリスト者と呼ばれたのだが〔『使徒言行録』XII, 26〕。

然り、**至高なる聖父**よ、あなたはあなたの**法**をお持ちだ。

追記。——いかなる法も、神に関わらぬ法でさえも、弱い人々の神経を逆なですることを私に強いてはいないのだから、これを限りとしてお断りしておく、たとえ話によって表現することが私の性向のひとつなのであり、ここでは明らかにそれが当てはまるのだと。レオ十三世の所有するいかなる賃貸家屋の住所も私にあげることができないのはたしかなことだ。しかし私はその気になれば、フランスのすべての教区教会を名指しすることができる、イノケンティウス三世なりグレゴリウス九世なりであれば、とうの昔に仮借なき**聖務停止**を宣告したにちがいない教会を、浮浪者が、例外なく、恥知らずにも、教会から退去させられるという、貧しい者たちの**神**の**代理人**をさんざんに貶めている、おぞましい事実のゆえに。

次の短い一編は、標題である常套句の意味を簡潔な物語が薄気味わるく照らし出すように書かれており、まさに「たとえ話」としての注解となっている。

CL

われらの友だちの友だちはわれらの友だちである。

Les amis de nos amis sont nos amis.

ブラン・ダンオーの騎士がノルマンディ高等法院付きの冴えない一弁護士の命を救ったことがあった。恐怖政治が始まると、感謝の念に満ちたこの弁護士は彼をある靴直しに推薦し、この靴直しが彼をある屎尿清掃業者に推薦し、この屎尿清掃業者が彼をある還俗したベネディクト会士に推薦し、この元ベネディクト会士が彼を女予言者カトリーヌ・テオに推薦し、カトリーヌ・テオが彼をロベスピエールに推薦し、ロベスピエールが彼の首をはねさせた。善行はけっして無駄には終わらない。

なお、この一編は別の常套句（それじたい、似たような意味を持つものであるが）の注解としても利用されている。こうした処理に、後述する、単調さの中に多様性を導入しようという作家の苦心を見てとることができるように思う。

CLXXVIII

人はみな兄弟である。

Tous les hommes sont frères.

CL を見よ。そこで題材は汲み尽くしたと信ずる。

3．ブルジョワ、信者、聖職者

この本の主人公が「ブルジョワ」にほかならないことは、ここまでの叙述および引用によっては、さほど印象づけられなかったかもしれない。じつのところ、最初に引いた序言からの引用にあったように、常套句の使用者は明確にブルジョワと措定されており、この前提は全巻を通じ揺らぐことはない。職業、性別を問わず、この本に登場する人物たちは、わずかな例外を除き、もれなくブルジョワなのである。はっきりとそうは書かれていないが、今しがた引いた「XIII」の教皇レオ十三世も、その行動様式に照らせば、ブルジョワの一人であると断じてさしつかえなかろう。教皇を頭とするカトリック教会もまた、聖職者、信者の群れの中に多くのブルジョワを擁している。

ブルジョワの中にはもちろん、キリスト教に敵対的な者もいる。たとえば次の物語に登場する、筋金入りの共和派である女性のように。

XX
あらゆる意見は尊重に値する。
Toutes les opinions sont respectables.

――それが心から出たものであればね、と魚屋が気どってつけくわえた。

――もちろん、とコルヌ・ドール〔金の角、の意〕の女主人が悠然と答えた。下宿人たちに出す腐りたての鮮魚をいくばくか買ったところなのだ。ほら、私は自由の味方よ。人は自分のために、神様はみんなのために。

――ごもっとも！　うまいこと言うね。ときに、ほれ、このムール貝はどうだい？　ただ同然にしとくよ、もってけ泥棒、ってやつだ。

――いえ、いえ、けっこうよ、火にかけたスープを見てこなくちゃ。じっさい、威厳ある女あるじは今すぐ家にはいりたそうな様子で、その肥満と買い物の詰まった巨大な網袋の重量とが許すかぎり迅速に移動を再開した。

ゾラ夫人は、二十年来、十七流の家具つきホテルを経営し、それにはおそるべきレストランが付属していた。コルヌ・ドールは、ヴァル＝ド＝グラースの近傍に位置し、見たところ、貧しい若者たちを顧客としていた。だが、ほぼ全室に適用された時間ぎめの家賃、のみならず買い物ごとの家賃が、女経営者の財布をぬくぬくと潤していたので、面と向かってお宅は淫売屋だなどと言われようものなら、彼女は憤り、かつ驚きもしたことだろう。

彼女はかつて、今は亡きヴァレスの若かりし頃、人の言うところでは、驚くばかりに裾をまくりあげて兵士たちの目をみはらせ、そうやって銃殺をまぬがれた一種の美女であったという。穏やかな五月の夜、いくつかのベランダの下で、石油缶と火のついた麻くずを、名人芸ともいえる手際で操ったという噂であった。おそらくはそれゆえに、彼女はあらゆる意見が尊重されるべきことを望んだのだ。このことに、彼女はまったくもって執着していた。

――小豚ちゃんはどこ？　と着くなり彼女は訊いた。

――教会の方に行くのを見ましたよ、いつものように、一時間以上も前に、とボーイのフェルナンドが答えた。

――やっぱり！　そうだと思った。年中教会、年中ミサ、年中神様！　ああ！　うんざりだわ！　帰ってきたら、叩き出してやりたいくらいよ。

小豚ちゃんは三十五歳のひょろ長いやつだった。抜け目ない投機で破産し、しがない職で暮らしていたが、安値にひかれて、コルヌ・ドールに下宿するのが良策と考えたのだった。育ちのよい、新世代にはほぼなじみのない、もうじきアングロサクソンの猛獣使いの中にしか見られなくなるだろう、一種の怪物であった。信心家ですらあり、これはゾラ夫人の手に負えるものではなく、彼女を完全に動顛させていた……。

気を鎮めて無関心にとどまることもできただろうに、と人は言うだろう。いやいや、彼女にはできない相談だった。心を奪われ、心を苛まれていたのだ。この半世紀が、下宿人の腕の中で終わるという夢を宿した。七十一年のヒロインはこの最後の恋という塩漬け容器を彼女の老いた肉のために望んだのだ。

相手が貧しく、無口で、ふさいでいるのを見、自分自身の中に一流の慰め手をみとめて、彼女は一人の不幸な男を独占するのはおそらくたやすいと思ったのだった。と思いきや、あのとんでもない宗教がしゃしゃり出て、邪魔にはいった。自分をあざむく余地などどこにもなかった。彼女には神様とともに歩むなどできる相談ではなく、彼女の商売もまた然り、だのにあの猫かぶりは、自分がきれいな女性に好かれたと見てとるや、たちまち逃げ出すやからなのだ。

まさしくその朝、彼女は決定的なアプローチを試みることを決意した。おそらくは、彼女がかつてマクマオンの赤ズボン隊〔パリ・コミューンを鎮圧した政府軍〕を武装解除したのと同じやり口を。ところがどうだ、あのろくでなしは信心行に出かけたという、何かに気づいたそぶりも見せずに。何も見ず、何も理解しなかったのだ！

ああ！　なんてこと！　彼女は彼の首に飛びついたり、ひざまずいたりはしなかった、そんなことをしたら致命的であったろう、少なくともコルヌ・ドールの年季を経た椅子にとっては、ゾラ夫人の体重は三百キロになんなんとしていたので。だが彼に向けられたこまごまと

した注意、媚び、愛情表現、一分ごとの、たえず更新されるあけすけな働きかけ、あれほど多くのまなざしとあれほど多くのほほえみ、すべてが彼にその意味を悟らせたはずではなかったか？　情けなや！　こうした思念に満たされつつ、彼女は機械的に、使い走りの男から手渡された一通の手紙を開いた。

「いとも親愛なるご婦人、とその言伝ては述べていた、私の部屋にあるスーツケースを配達の者にお預けください。私はあなたのもとを去ります、このうえない苦しみとともに、幸いなことにこの苦しみは、いとも純潔なるあなたの眼から私の顔の扇情的な美しさを隠すことであなたの魂に平安を取り戻させるという希望によって和らげられておりますが。おおあまりに優しくあまりに燃えやすいゾラ、私はあなたを尊重しております、ひとつの意見と同じくらいに、数えきれないほどの、つねにかくも若い、あなたがあれほど頻繁に尊重するよう勧めておられたあのさまざまな意見のひとつと。いざさらば、おおエミリー、そのお姿は私の心に取り外しようなく刻まれております。アルフォンス・アレー、もと一流薬剤師。」

――汚らわしい信心家め！　と心優しき女主人は怒鳴った、ほかに言いようはないと信じながら。ブルジョワ女が誤ったためしはひとつとしてない。

とはいえ、ゾラ夫人（ちなみにこの名は、ブロワが嫌悪していた共和派の大作家エミール・ゾラへの当てこすりのひとつである）のような登場人物はむしろ例外である。二十世紀初頭のフランスでは、まだ国民の大多数が幼児洗礼のカトリック教徒だったわけであるから、作中で醜行を演じている人々、すなわちブルジョワたちの大半が、（回心せざる）信者たちであることを、つねに念頭において読まなくてはなるまい。フランス社会に向けられたブロワの認識は、同時に信者の共同体である教会にも向けられているのである。信心深いこととブルジョワであることが、当人の主観において何ら矛盾なく共存している次の例は、ブルジョワ・カトリックの欺瞞性を強く印象づける一編となっている。

LXXVIII
人は自分のために、神様はみんなのために。
Chacun pour soi et le bon Dieu pour tous.

プリュタルク夫人は、「プリュタルク姪叔父商店、文具と聖具の店」の女主人であり、日々小教区の教会で、聖体を前に黙想している。いとも敬虔なる女性だ。

――全能の神の愛すべき子である方、と彼女は言う、マム書店やプシエルグ書店、いまさら賛辞は不要のこれら書店が出している、あの手の本の一冊の助けをかりて。おおこの世から罪を除くために来られたいともやさしき主よ、あの汚れの中で生き、死の陰でうめいている彼らをあわれんでください……。またあなたにお願いいたしましょう、聖年を機に少しばかり多くの人々を私たちのもとにお送りくださいますように。虫が食いはじめた綿製の古いスカプラリオを売りさばく、またとない機会となることでしょう。まだたくさん売れ残っていることは、あなたがご存じです……。

あれほどの愛をもって罪びとたちのために身をお捧げになった汚れなき子羊よ、彼らをあわれみ、あなたの奉献の功徳によって彼らを悪霊への隷属から解放してください……。素焼きの聖水盤を注文しすぎてしまったかもしれません。お客さんの中に高すぎると文句を言う人がいますが、利ざやのいい商品ですので、これよりまけるわけにはまいりません。夜逃げする羽目になってしまいましょうから。幸いなことにすぐ割れますから、いつでも入り用になります。数でとりかえすのでございます……。

私たちの罪が、おお神なる救い主よ、あなたを十字架につけた者たちにあなたを苛む道具を携えさせたのです……。そうはいっても商売は商売で、商品をただであげたりしたら、やりくりする算段などつきはしません。それから、冬枯れの季節というものがございます。カテキズム一冊、インクひと瓶、紙一枚だって売れやしません。そんなとき、店のそこここに、ちょっとした軽い小説や、少しきわどい品物、いくらか透かしの入った――まあなんてこと（モン・ディウ）！――トランプ〔絵柄を光にかざすとみだらな絵が現れる〕なぞを置いたら、買う人たちに好都合ではございませんか？　それに、あなたはご存じです、私はそういったものを、身なりのよい年配の殿方にしか売りはしません。そのどこがいけませんの？　ああ！　やさしいイエスさま、商売なんか絶対になさってはいけませんことよ！……

この神秘は、私たちに体の苦行を教えています。笞打たれる救い主に倣うために、聖人たちは血の笞をまといました……。おお！　この笞も、売れ行きがはかばかしくないんです！　さえない聖フランシスコの紐を何本か売ったって、買う人はほんのひと握り。馬の毛がもう入り用でないことは、私にだってわかります。私たちの祖国ではみんながやっているように、アルスの司祭〔ジャン＝マリー・ヴィアンネ。1925年に列聖〕が着ていたということにした古い苦行衣が何枚か売れ残っておりました。それを片づけるのにどれだけ苦労しましたことか、もうこれを置くのはあきらめました……。

私はみとめます、おおイエスさま、あなたの死こそが、私の中の罪を滅ぼしました。あなたの復活こそが、私が長いあいだ死の眠りを眠っていた悪徳の墓から私を救い出しました……。じっさい、私たちの店は、どうにか発

展できそうです。あの座薬製造業者はもう何もできません。賃貸借契約書を半値で譲り渡さないとしたら、たしかに悪魔の所業です。それにドレフュス派ですから、破産するのをせいぜい手伝ってやります。当然の報いというものです。娘の方は、胸の病で死にますが、彼女をよろしくお取りくださいますように。あの子にはよくしてやろうとしたのに、それでおかしな報いを受けました。父親が、私たちがあの子を一日店の中で立ちっぱなしにさせて、それであの子を殺したと責めるだなんて、まるで隣人の病気に私たちの責任があるみたいじゃございませんか。人は自分のために、神様はみんなのために。あの子がこれ以上働けなくなったから、お払い箱にしたまでです、世の習いどおりに。あなただって、私の贖い主であられる方、同じようになさったのじゃございませんか？　人が私をこの先ずっと中傷し続けるだろうからには、最後まで自分の十字架を背負う覚悟です、あなたのお恵みを助けとして。この涙の谷でも永遠の至福の中でも、私には神様への愛があればほかに何もいらないことでしょう。アーメン。

同様に、当時の教会に多数いたとおぼしい「ブルジョワ聖職者」「ブルジョワ司祭」も、注解者の冷厳な観察の対象となることを免れない。以下の二つの例では、著者ブロワの実体験に基づき、雄弁で名高い十七世紀の司教ボシュエ（「モーの鷲 l'Aigle de Meaux」と仇名された）の名とともに記憶されるモー司教区の司祭たちが槍玉にあがっている。

XXXVII
狼たちといるときは遠吠えしなくてならない
（＝周囲と同調しなければならない）。
Il faut hurler avec les loups.

年老いた犬によって遺贈されたにちがいない、貴重な格言。遠吠えするとは、あえて言う必要もあるまいが、曲言法、婉曲語法である。これが指すのは、狼たちが行なっていること、すなわち羊を食べることだ、もちろん、番をするようゆだねられた羊たちを手始めとして。

ブルジョワ聖職者は、これがむしろ快い慣行であると全員一致で認めている、羊の肉は絶佳であるうえ、あらゆる種類の犬の胃によいから。エゼキエル書には、彼らに消化不良を予言しているかに見える、脅しのきいた一章がある。だがブルジョワ聖職者のあいだでエゼキエル書が読まれることはおよそない、とりわけモー司教区では。想像するに、そこではこの書がいささか流行遅れだと思われているのだろう。モー司教区の名をあげたのは、私がそこで暮らしており——かつがつの暮らし向きだが、羊飼いでも、牧羊犬でもないゆえ——幾人かの司祭を観察する機会を持ったからだ、ボシュエが予想だにしなかった、子鷲には似ても似つかぬ司祭たちを。

のちほどこの**神**の奉仕者たちについて、細部にいくらか贅を凝らしながら語ることにして、いまのところは、番犬が、狼といっしょに遠吠えしすぎて、毎朝毎朝、**子羊**の**肉**と**血**とを黙って呑み込む「声の出ない犬」になってしまったという、まったくもって教会らしい寓話を、彼らに進呈しておくとしよう。

XCIII
手を差し出す（＝物乞いをする）。
Tendre la main.

この常套句はモー司教区の聖職者に私を立ち戻らせる。あるとき私は、ラニー主席司祭教区直属の一小教区の司祭のところに施しを求めに行く経験をした。彼は私にそれを拒んだ、あえて言う必要もあるまいが、油と蜜のしたたる、月のように優しく冷たい言辞とともに。

このまだ若い聖職者は、老いた鼠の風貌を持ち、その習俗も併せ持つかに見える。顔は〔ドーナツ型の〕革ざぶとんのように円く、腸詰のように光沢があり、寄付金を嗅ぎつけようとたえまなくひくつかせた鼻の上方に黒い釘の頭の両眼が光っている。ピュセル神父はブルジョワ司祭の典型である。

考古学の知識を鼻にかけ、話し相手を見つけては、自分もまた「印刷機に悲鳴をあげさせた」ことがあると自慢する。ゆっくり、「聖ペトロとパウロオ」と発音する。信者が貧しい人たちのためにと渡した金を懐に入れ、年老いた両親を召使として働かせている。驚くべき、およそ前代未聞の特性をひとつ、つけ加えておくと、小教区の小売店主たちに気に入られるため、生活困窮者たちに罪の赦しを与えるにあたり、請求書の払いを済ませるよう要求する。

言うまでもなく私は、かっこうの話題をもち出す機会を逃さず、自分が『恩知らずな乞食』と題する自伝の著者であり、施しだけで暮らしていること、さらには、キリスト者にとってこれ以外の生活手段は考えられない旨を明かした。去り際に、彼がこの作り話を信じこみ、それでいていささかも動ぜずにいるのを、満足とともに見届けたのだった。

それからしばらくして、もっと正確に、身を入れて話す機会が訪れた。私がその小教区の信者だといっても過言でないこのすてきな司祭が、司祭職の遂行にあたって、私の言葉のいくつかを重大なやり方で悪用したのだ。私は、侮辱を受けたゆえ、私の家で謝罪するよう、さもなくばまず彼の長上に、次いで新聞に訴え出ると書き送った。この最後通牒にはたしかな利き目があり、な

らず者はすぐにやって来たが、それは謝罪のためではなく、謝罪するいわれはないと私に証明するためだった。神学校の**常套句**に立てこもり、**聖性**、福音的**完徳**、**神**の**言**〔イエス＝キリスト〕、**祈り**、といった、現金化された栄えある**銀**でないものいっさいに対する難攻不落の蔑視で身を固めた彼は、打ち負かせる相手には見えず、たちまち私の戦意をうばった。

それが何であれ、彼にわからせることは不可能だった。ここまで馬鹿な人間に会った記憶はない。ああ！**聖職者の凡庸さ**に関するわが観察記録を補完するためのみごとな材料が目の前にあった！　〔恩寵や徳を〕獲得する祈りについて質問すると、――神は聖人を嘉するためでなければ奇蹟を行われない、とこの愚か者はのたまった。私がただちに、福音書の十人の癩者〔『ルカによる福音書』XVII, 11-19〕やルルドの治癒の例をあげて反論すると、ぐうの音も出ず、焼き魚のように口を開けたままだった。

もし私がとうの昔に迷妄から脱していなかったとしたら、このスータンをまとう人物が私が**聖句**を引くたびに浮かべる職業的な微笑は、現代の聖職者のおそるべき品性の下落について目を開かせてくれたことであろう。おそろしいことだ――しかしまた、慰めでもある、**大変動**の予兆とはこのようなものにちがいないという観点からすれば。

この会見の中で、彼は私に、ご親切にも、物書き以外の職業、何かしら「身を養う」職についてはどうかと助言してくれた。この助言をそっくりそのままお返ししたら愉快だっただろうが、それは控えた。それにしても最高度に意味ぶかく思えたのは、「物乞いをする！」という怖気をふるったような嘆声が、たえず、なかば自動的に回帰することだった。

私が神への大きな信頼を述べたがゆえに、私の生業が乞食であることにどうしてもしたくてならない彼は、この三語を何度繰り返したことだろう、一種親密な、心の底からの恐怖をこめて、そうやって、――よりいっそうの驚きをおぼえるべく――彼が私に仮構している習慣化された態度を名指ししながら！　明らかに、そうした行い、これなしには自分が貧しい者たちの**救い主**の**友**であると考えることはほとんど不可能なのだが、それが彼の目には、恥辱の極み、破廉恥の極みと映っていた。来訪は栄光なく終わった。私はこの哀れな男に駄目神父の証書を授与した、それをもらうために来たと思われたので。われわれの関係はそれきりとなった。

この不潔な記憶は薄れさる。私の熱に憑かれたような**常套句**研究がことさらにこれを呼び覚ましたのだった。それにしても、差し出された手に対するあの嫌悪、一万の聖人のそれであった動作を恥じるという背教的かつ冒瀆的な態度は、一身のうちにひとつの世界全体を要約しているこの祭壇の去勢馬を、みごとに、おぞましくも、特徴づけるものであったと思われないだろうか？

4．注解の二つの型：（2）評釈

はじめに述べたように、『常套句注解』という書名からまず想起されるのは、個々の句に対し著者が評釈を加えるという表現形式であり、数の上ではやはり、物語の形式をとるものよりもこちらのグループの方がずっと多い。これらの諸編が、この作品に、重厚な、人によっては奇矯とも映るであろう、思想書としての性格を与えている。

ここでも主役はブルジョワであり、「常套句」の「注解」とは、端的に言って、言葉の使用法をなかだちとした「**ブルジョワ**の道徳的・哲学的研究」（「XLIX　パリは一日で建てられたのではない。」）にほかならないことを、これらの諸編がはっきりと示している。「研究」とはいっても、ありきたりな論述形式には収まることなく、そのつど予想もできない角度から対象を料理するさまを、以下に列挙する数編をとおして味わっていただきたい。

CIV

鐘ひとつしか聞かない者は音ひとつしか聞かない
（＝正しい判断を下すには、異なる二つの意見に耳を傾けねばならない）。

Qui n'entend qu'une cloche n'entend qu'un son.

同じ人間が、鐘をたとえば十二、聞くとしたら、十二の異なる、互いに反目しあう音を聞くことになる、と結論するのは、子供じみているように思われる。ところがそれこそがまさに、**ブルジョワ**の言いたいことなのだ。

実のところ彼には、互いに相容れぬ鐘、同時にがなり立てる鐘、お互いの音が聞こえないほど耳を聾する鐘が必要なのだ。われらの教会のカリヨンの超自然的な諧調は、彼を憤激させ白痴にする。大きな祭日、鐘が打ち鳴らされているときの彼を観察してみるがいい。彼の中に動転し身ぶるいする一頭の獣の姿を感じとり、目にすることだろう。**祝別された**鐘は、この人物のはらわたに届いて、無秩序へと向かうなにやら神秘的な欲望を撃つ。というのもそれが**ブルジョワ**の要諦だから。彼は無政府主義者なのだ、神秘的なしかたで、――深いところで。

そこから彼の鐘への憎悪が説明される。鐘は、一人の**司教**、すなわち神の**唯一性**を告げ知らせ他との境界を指し示す者によってのみ聖別される。一つの鐘の音、ただ一つの音は、あまりにも天から来たように思えてしまう。それゆえに彼を怖がらせるのだ。

CLXVII
火のないところに煙は立たない。
Il n'y a pas de fumée sans feu.

そのとおりだ、**ブルジョワ**よ、黙示録においても然り、お前のことがふんだんに語られているこの書においても。

「その苦しみの煙は代々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者、また誰であれ獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も憩うことはできない*。」

この箇所をお前に勧めよう。

*『ヨハネの黙示録』XIV，11。

かつて、――限りなく読まれた――『キリストに倣いて』があった。ずっと後、前世紀の終わりになって、『月の聖母に倣いて*』が現れたが、著者は餓死同然の死に方をし、私をはじめとして、誰も二度と読むことはないだろう。私は何度か、枕頭の書の一つとして、『アノトー**に倣いて』の執筆を考えたことがあるが、文体の不在、思考の徹底した鬱状態が必要であろうから、こんな企画は、アカデミー・フランセーズ会員にすらも、提案できるものではなかった。

*ジュール・ラフォルグ（1860-1887）の詩集。邦題は『聖母なる月のまねび』。
**ガブリエル・アノトー（1853-1944）。

CLII
枕頭の書。
Un livre de chevet.[8]

これはエリートの話である。平均的なブルジョワは何一つ読まないから、したがって、枕頭の書を持たない。衣料品店主やワイン卸商の興味をおおむね引くことのできる唯一の書（リヴル）は、現金出納簿（リヴル・ド・ケス）、角に銅をあてがった巨大な二つ折り本で、これが長枕の下にあるところなど想像もできない。

工員はこれよりも読む。彼らが読むのは、もちろん、彼らに読みうるものだが、それでも読む。彼らは**商売**に属していない。**偶像**の直接の監視下にはない。日に半時間、彼らの魂、哀れな彼らの魂に専心する許可を得ており、それを役立てる者もいる。

それでも、ブルジョワの中にもエリート層があって、この神聖なるエリート層は、少なくとも、三十二半旅団ごとに一冊の枕頭の書を持つと推定される。その書とはいったい何であろう？　それを知ることは私には不可能であった。対数表と一緒に寝るという何人かの数学者の話を聞いたことがあるが、私は馬鹿にされたのにちがいない、これはあまりに文学的というものだ。

むしろこう信じたい、少なからぬ老婦人がまだいくらかはポール・ブールジェかモーパッサンの腕の中で眠り、さまざまな世代の未婚婦人たちが、サド侯爵の『閨房哲学』、あるいはこれと同じジャンルに属するまったく別の本を、腹に詰めこんでいるのだと。だが確証は得ておらず、かの有名な枕頭の書についてどう考えていいかわからずにいることを打ち明けねばならない。人々がたえずそれについて語っているからには、それが存在するにちがいないのだが。

CXV
二つの物事を一度にはできない。
On ne peut pas faire deux choses à la fois.

Nemo potest duobus dominis servire. 誰も二人の主人に兼ね仕えることはできない*。のブルジョワ語訳である。果敢に原文を引くことを阻んでいるのは一種の羞恥心であることが、物事（chose）の一語から判断できる。これはたとえば、彼はまったくもってあれ（ショズ）だ、とか、彼はあそこ（ショズ）が痛い、とか、彼はあれ（ショズ）を見せるのを恐れている、と言うのと同じなのだ。というのも**ブルジョワ**は美しいもの、あるいは高貴なものに羞恥をおぼえるからだ、他の人々が不潔なもの、あるいはおぞましいものに羞恥をおぼえるように。この微妙なちがいに彼の天才がはっきり現れている。

とはいえ聖書の原文は、このように訳されてさえ、彼を縛りはしない。なぜなら、レギオン**という名の**あの者**に憑かれた彼、それと知らずに荒れ野の墓の借家人となり、二千頭の豚も容易に引っ越させることのできない彼は、必要とあらば、あらゆる調教師から逃げつづけるからである。

ブルジョワが主の霊とともに歩んだとしたら、それはもう彼ではない。彼は相反する二つの物事を行うことはできないと認めはする、おそらくは、だがそれは、それらの物事を同時に行うという場合に限られる。そうでさえなければ、なんら問題なし。たとえば、父親の名誉となることと、父親の顔にゴミ袋を投げつけることは、彼にとって両立可能な二つの行為なのだ、同じ十五分のあいだにそれらを完遂することのないよう注意を払っているならば。すべてはそこに存する、二つの物事をいちどきには行わないこと。厳格すぎる教えのみごとな緩和。

[8] ブロワが取り上げる「常套句」には、このように文の形をなさない名詞句（前出「IV」がすでにそうであったし、後出「LII」もまたその一つ）、あるいは不定詞句（後出「LXXX」「LXXXII」）も少なからず含まれている。

その帰結を、数えきれないその適用例を、眺めるだけで十分だ……。

福音を永久に固定してくれる**靴直し**はいつ来るのだろう？

*『マタイによる福音書』VI，24。
**『マルコによる福音書』V，9。

CXII
青年に経験が、老人に力があったなら！……
Si jeunesse savait, si vieillesse pouvait !...

いったい何が起こるだろう？　賢慮ある**ブルジョワ**はそれを言わないでいる。だからここではっきり知っておいていただこう。青年に経験があったなら、青年は老人さえもが思ってもみない馬鹿げた行いをなしとげるだろう、そして老人に力があったなら――ブルジョワの老人だ、言うまでもなく、――もう一度問うが、何が起こるだろう？　当てられるものなら当ててみたまえ。

老人は徳を行うだろう！　そして世界の表面は一変するだろう。これが私が長いことすっぱ抜くのをためらってきた恐るべき秘密だ。

XLIX
パリは一日で建てられたのではない。
Paris n'a pas été bâti en un jour.

そうかもしれない。これだけ大きな町を建てるのにどれだけの日数がかかったは知らないが、何日もかかったことは大いにありうると思う。さらにいえば、それは少しも重要ではない。

ブルジョワの道徳的・哲学的研究にとって重要なのは、彼がこうした形で、パリが一日で建てられたのではなかったとの彼の願望をたえまなく表明しているということだ。そこには、何かしら彼を煩悶させるものがあるのだ。彼にとってこれほどどうでもいいことはないと人は考えるかもしれない。否！　ちがうのだ。もしパリがたった一日で建てられたのだったとしたら、この男は絶望にかられたことだろう。彼はそこに、**俗っぽさ、少しずつ、陳腐さ**に対する、ほとんど言語を絶するほどの蹂躙をみとめるのだ！！！　要するに、奇跡のたぐいをだ！

それでも、真実は述べておかねばならない。今日の姿の、百万の家屋をもったパリが、二十四時間で建てられたということは、もちろんありえなかった。とりわけガンベッタ像とアレクサンドル三世橋*、人が手を抜くことをしない、ああした傑作のことを考えに入れるならば。

だがこの広大なパリにも、始まりというものがあった。セーヌ川の両岸にその時点では何も存在しなかった瞬間がかつてあり、これに続く別の瞬間があった。このとき何かが存在した。藺草で編んだ屋根なり、何らかの小屋が、その後もあり続けるべく作られたのだ。まさしくこの瞬間をもって、パリが、潜在的に、可能性として、そしてそれゆえ十全に、建てられたのだと言いうるのだし、そう言わねばならない。なお私は付言する、このパリは今より美しかった、比べようもなく、計り知れず、想像もできないほど美しかったにちがいないと。だがどうしたらわかってもらえるだろうか？

*ガンベッタ像は1888年に、アレクサンドル三世橋は1900年に、いずれも四年をかけて落成した。前者は1954年に解体され、跡地には現在ルーヴル・ピラミッドが建っている。

CLXVIII
ふたつの悪のあいだでは、
より小さい方を選ばねばならない。
Entre deux maux, il faut choisir le moindre.

これについては、不確かなところはない。もっとも慈悲ぶかい人々が、隣人の苦しみはつねにより小さい方であり、たしかにこれを選ばなければならないことを認めている。モラリストたちは久しい以前から、人はつねに他人の苦しみに耐えられるだけ十分に強い、と指摘してきた。

XL
人は楽しむために地上にいるのではない。
On n'est pas sur la terre pour s'amuser.

えっ、楽しむためでないとしたら、何のためにそこにいるのか、おっしゃっていただけますか。苦しむためなんですか？

然りであり否である、だが誤解してはならない。ブルジョワの言は両刃の剣なのだ、イスラエル三代目の士師である、ゲラの子エフドの剣のように*。苦しみは他人の取り分であり、彼のみが楽しむために地上にいる。この掟を失念するや、何もかもわからなくなる。

貧しい者がいなくなることはないと**福音書**に書かれている**。当然のことだ。ブルジョワがみずから苦しみを引き受けることをお望みか？　ところが彼には召使だけでは足りない、奴隷が、不幸な者たちがいて、その体を疲労困憊させその魂をしおれされることが彼には必要な

のだ。これが彼の楽しみだ！　多くの魂をおとしめ、汚し、絶望させること……　貧しい者が苦しみの叫びをあげると、この慰めが差し出される、「人は楽しむために地上にいるのではない」。そして彼は悪霊たちの中にいると信じる。

*『士師記』III，12-30。
**『マタイによる福音書』XXVI，11、『マルコによる福音書』XIV，7、『ヨハネによる福音書』XII，8。

LII
家族の誉れ
L'honneur des familles.

かつて、言葉の意味の廃止がまだ公布されていなかったころ、一家の誉れとは、**聖人**か**英雄**を出すこと、少なくとも国家を益する奉仕者を出すことに存していた。これは、富裕であるか貧しいか、高名な祖先を持つか持たないかには関わりがなかった。後者の場合、その人は貴族の身分にのぼった、自然に、単純に、物事の性質のみにしたがって。

今日、家族の誉れは、もっぱら、ただひたすらに、憲兵の手にかからないことに存している。

開明的なブルジョワは、ときに、相手に熟考を求めたうえで、彼がけっして特定することはしないごくごく少数の場合において、貧しいことが不名誉ではないこともありうると認めることがある。だが、何物も、司直により有罪判決を受けるという恥辱を拭い去ることはない、地方においてはとくに。

殉教者たちの遺骨が何世紀にもわたって祭壇の上に置かれていても、**教会**が彼らの祭日にカリヨンを鳴らし彼らを栄光で満たしても、猜疑心でいっぱいの**ブルジョワ**は、彼らのうちに、むざむざ捕まった粗忽者、前科者を見るのだ。聖ラウレンティウスの姪は結婚相手を見つけられないし、**悔い改めた盗賊**〔『ルカによる福音書』XXIII. 39-43〕の従兄弟のひ孫が役所で俸給千二百フランの職にありつくことはけっしてない。

ブルジョワの**キリスト教**に対する嫌悪には、その名誉の感覚が大いにあずかっている、――このことは、これまで十分には指摘されてこなかった。彼はどうしても折り合いをつけられないのだ、その「創設者」が、不名誉な罰をこうむったのち、三日目に、その家族の不名誉を永遠に思い知らせるべく甦った、そんな宗教とは。

LXXX
悪魔ほどの値打ちもない。
Ne pas valoir le Diable.

いったいどこに、自分は悪魔に比肩すると豪語するような真人間がいるというのか？　考えてもみてもらいたいのだが、しょせん悪魔であるとはいっても、これは天使、それも大勢の天使たちの長にちがいないのだ。そこここの土木技師なり憲兵隊長なりが、この言葉によって、誰それはたいした者ではない、あるいは何者でもないと言いたいのだとしたら、途方もない言いまちがいというものだ。ある人間について、彼は百万長者ほど金持ちではないと言うことは、彼が貧乏だということを含意しない。まさしく**悪魔**ほどの値打ちがない者であっても、無数のブルジョワの道徳的・知的な価値を雑作なく資本に組み入れることができる。悪魔に比肩する誰かなど、どう考えろというのか？……

言葉に注意しなくてはいけない。**悪魔**は人が自分を彼にたとえることを好まない、たとえ彼ほどの値打ちがないと言うためであっても。しかも彼を呼び寄せる言葉というものがある。「われわれが**神**に向かって、あるいは**神**のために話していないとき、と、ほとんど世に知られぬ一作家は言った、われわれは**悪魔**に向かって話しているのであり、彼は恐るべき沈黙のうちにそれを聴いている。……*」

*現ローマ教皇フランシスコが教皇選出後の最初の説教（2013年３月14日）で引いたブロワの言葉「主に祈らない人は、悪魔に祈る」は、この箇所に拠るのかもしれない（説教全文の日本語訳をカトリック中央協議会のウェブサイトで読むことができる。https://www.cbcj.catholic.jp/2013/03/14/6608/）。

LXXXII
時を殺す（＝時間つぶしをする）。
Tuer le temps.

ブルジョワの修辞学において、時を殺すとは、言うまでもあるまいが、ごく単純に、楽しむことを意味する。**ブルジョワ**が退屈するとき、時は生きる、あるいは甦る。わかっていただけようがいただけまいが、そうなのだ。**ブルジョワ**が楽しむとき、人は永遠の中に入る。**ブルジョワ**の娯楽は死のごとくである。

I
神はそこまで求めていない！
Dieu n'en demande pas tant !

民法典の解説書に添えた、なんという題辞！　あまりにお手軽な冗談というものだ、新聞記者か守衛見習の方々が垂れ流すなら大目に見るべき体の。ことは重大で

ある。

思うだに驚倒すべきことではあるまいか、この代物が、日に何百万回も、とりわけ自分を食べるようにと「求める」**神**の面前で、罵倒をもって口にされているとは？この**常套句**が含意する終わりなき取引には、心を乱すものがある、飢餓によって苛まれ、みずからの糞で身を養う状態におかれている世界が、なのに食欲を欠いていることをまざまざと示しているという点で。

この定型表現は、人が思う以上に玄妙なので、次のように指摘したところで児戯の域を出まい、いっさいはそこまでの語に支えられており、この語の漠然とした語義は、随意的でけっして明らかにされることのない尺度につねに左右される。これはもちろん魂の段階しだいである。

そうではなく、およそ否定なるものの傾きは無に向かうのだから、こう結論してなんらさしつかえない、神の定かならぬ求めは無に等しく、この神は、つまるところ、際限なくその熱意を収縮させうる崇拝者たちに求めることなどもはや何もないのであるから、いまや自らの**存在**と**本質**を用いるすべを持たず、必然的に消滅するしかないのだと。じっさい、人が神についてなんらかの観念を持つことは、これ以上はないというほど重要でなくなっている。神自身、そこまで求めていない、これが肝要な点だ。

私がわが洗濯屋のアラリック夫人に、上の娘四人にさせたようには末娘には売春させないほうがいいと勧めるとき、あるいはわが家主のデュベゼ氏に、おそるおそる、幼い子供たちに死刑を宣告することが社会の平衡のために不可欠だとは考えなかった聖人の例にならってはと提案するとき、そしてこの立派な人たちが私にこう答えるとき――私たちはあなたと同じだけ信仰心を持っておりますよ、でも神はそこまで求めていない……、私は認めないわけにはいかない、こうつけ加えないだけ彼らは親切なのだと――「それどころか！」だが明らかに、必然的に、それが彼らの考えの根底なのだ。

彼らは正しい、おそらく、なぜなら**常套句**の論理は容赦ないから。神がそこまで求めていないのなら、無敵の帰結によって、神は強いられることになる、繰り返すが、求めることしだいに少なくなり、そしてついにはすべてを拒むようにと。いやそれどころか。神にそのときなおいくらか存在が残されているとして、ほどなく神は、人が豚のように生きることを望み、その雷の残余を忠実な人々や殉教者たちに投げつけるという欲求でいても立ってもいられないことになっているだろう。

ブルジョワは、それにまた、あまりに愛らしい人々であるので、自分たち自身が**神々**とならずにはいられなかった。求めてよいのは彼ら、彼らだけである。あらゆる命令は彼らに属し、確信してよいが、彼らがあまりに多く求める日は、彼らがまだ十分には求めていないということに気づきはじめる、その同じ日となることだろう……。

――私は、お前たちの皮を求める、汚れたごろつきども！　と**誰か**が彼らに言うだろう。

5．単調さの回避：再登場の手法

一部を抜き出す形で『常套句注解』を紹介してきた本稿では、全巻の構成についてふれる余地がなかった。パラグラフ同士の関連、たとえば連続したパラグラフで、前のものが次のものを召喚する動きなど、指摘したい点は多いのだが。

ここでは、パラグラフの配置を統御し、書物全体に何らかの美的水準を獲得せしめようという書き手の意思のひとつの現れとして、主題そのものに内在する単調さの自覚と、これを回避するためのひとつの便法を指摘するにとどめたい。

LXVIII
私は誰の助けもいらない。
Je n'ai besoin de personne.

ゆえに、私は**神**である。これは、ブルジョワの言ほとんどすべての必然的な結論であると指摘できる。このことは一度ならず述べた。**常套句**はこのように、あるものが他のもののうちに入り込んでいる、望遠鏡の筒や、あるいは貨物列車に衝突された急行列車の客車がそうであるように。見物人にとって愉快な眺めだが、しまいにはうんざりしてくる。

同じことをくどくど繰り返すことは、この種の書物のほとんど避けがたい障害だ。だが、最後までたどり着く力が与えられるものと思っている。ブルジョワであるという名誉を持たない私は、何の気がねもなしに、みんなの助けがいると言おう。なによりもまず、ほかならぬ**ブルジョワ**の助け、題材を提供してくれることによって。それに、彼もまた、ともあれ移り気なわれわれの種に属するからには、いくらかの多様性で注意ぶかい観察者に報いてくれるのだ。

このほとんど必然的な単調さから、手を変え品を変えてなんとか作品を救おうとする書き手の配慮は、前節４．に引いた諸編からも読みとれたはずだ。読者を飽きさせない工夫のひとつに、いまかりに「再登場の手法」と呼んでおきたいものがある。たがいに隔たった別のパラグラフにおいて読者が同じ人物に再会する場合を、家主エドゥアール爺さんの例とモー司教区の司祭の例と

で、われわれはすでにみた。この「再登場の手法」は、人物のみならず、常套句についても認められる。「XX あらゆる意見は尊重に値する」の冒頭に、LXXVIII の「人は自分のために、神様はみんなのために」が顔を出していることに気づかれた読者もおられよう。次の例では、この手法が際立った効果をあげている。

CIX
少しずつ、鳥は巣を作る。
Petit à petit, l'oiseau fait son nid.

――卑しいブルガリア人！　とサント＝ペリーヌ伯爵夫人は叫んだ。彼女は正しかった。あの編集長以上に憎むべき徒輩に遭遇することは金輪際ありえまい、それはたしかだ。あいつは付加形容詞ぬきの下司野郎、絶対的**下司野郎**だ。いまは世にないある偉大な詩人が、陰鬱な彼の雑誌にとって信じがたい名誉となるはずの韻文作品を提供すべく訪れたさいに、振り返るそぶりさえ見せず、のちに有名になったあの返事――ご面倒でなければ、原稿はご自身で屑かごに捨ててくださるよう、を発したのは、ほかでもないこの男である。

そこへ彼女を派遣しようと彼女の夫が思い立ったとは、あっぱれな着想であった！　ならず者が彼女に対する尊大さには、助産婦（サジュ・ファム）というかつての職業ゆえに男のがさつな振る舞い全般に対して備えができていた彼女も、息を詰まらせた。これまで心地よく自画自賛してきたように、この粗野な男をたじたじとさせるどころか、ひとこと言い返すことすらできなかったのだ。みずから危地に乗りこんだ甲斐があったというもの。怒りに全身をふくらませて彼女は帰宅した。

モーリス・ド・サント＝ペリーヌ医博、夫人の夫であり神秘的な選抜の結果伯爵でもあるこの人物は、驚くべき出世主義者で、今や著名人で斯界のご意見番として鳴らす身、ものの十年足らずの間に**糞の大河**を飲み干した。この物語の当時は、ようやく第一歩を踏み出そうかという段階で、果敢にも人口三十万の町が誇りとしていた田舎の助産婦と結婚したところであった。陽光が文無しに少しばかりの晴れ晴れとした喜びを注入するように、縮れて密生した黄褐色の髪を持つこの人物の到来は、この医学生に少しばかりの産科学を注入した。彼らは理解しあい支えあった、妻がシチューの残りを、夫が嗅覚の端緒を得ることで。

夫は、現代という時代の愚かさゆえこれは部分的に実現をみたのであるが、食堂や急行列車のための、定期あるいは不定期刊のエピダウルス〔医療の聖地として知られた古代ギリシアの都市〕・ジャーナリズムという手段を用いた一種の文学的クリニックという計画を心に抱いた。もっとわかりやすく言えば、その計画とは、人々が読む新聞雑誌に――陰険な看護師が患者たちの尻にガラス管を挿し入れるように――むろん誰の害にもならない、緩和性小記事を挿し入れる、というものであった。精彩のない、流麗で中立的な医学界の消息、ポトフをこしらえるために浣腸を行うのにも例えるべき役立たずの代物。馬鹿馬鹿しく生ぬるくはあったが、幾人かの名士の胸飾りの上に反響がないではなかった、彼らにしてみれば、ともかくもただで賞賛される幸運に浴するのであるから。

平板さと卑劣さを積み重ねることで、くじけることを知らぬモーリスは、ほとんど権威者に類する者、炯眼な観察者、業界通信を事とする南京虫たちのうち随一の事情通と目され、こうして社会のすき間、**この世**の年経た店舗にできた亀裂もしくはひび割れに入りこむにいたった。私の聞き及んだところでは、得意客すら見出したのだそうで、妻はといえば、その重いパン種が彼らの困窮という容器の中で時間をかけて発酵し、いまやとうとうサロンを持つ身分である！……

だが、繰り返すが、今話題にしている時期にあっては、こうした権勢はすべて、まだ先のことだった。モーリス医博は最下層の使用人なみの金策からいまだ解放されておらず、原稿を押し込むための交渉にその伴侶を使っていた。彼はこのルキナ〔ローマ神話の女神ユノの異名。出産を司ると信じられた〕を恃んだのだ、産道でつかえている好意が日の目を見、胎内にぐずぐずしている善意がめでたく分娩されるようにと。

とはいえ、私が何か卑劣な行為をほのめかしているなどとは思わないでほしい。助産婦は誰にも報酬を与えなどしなかった、しつこく相手をわずらわせる以外のことはしなかったのだ。これに絶望するなり夢想するなり、おのおの自由にされればよいが、自殺の噂などいっさい耳にすることはなかった。

――あいつが私になんて言ったと思う？　帰り着くや、彼女はフラゴルナン屋（へつらい）・ド・ラ・レシュリ（おべっか）・デュ・ヴァル・デ・ザメニテ（愛想のよさ）・ド・サント＝ペリーヌ伯爵に向かって叫んだ。聞いて！　そっくりこのとおりの言い草よ。「ご主人のような馬鹿が出る幕はうちにはございませんな。名も知られ、読者もありがたがっているもう一人の下司男と、役がかぶってしまう。それにご主人の面がまえは気に食わない、あんたのもね。だから、左向け左、とっとと出て行きなさい。」

伯爵医博は広大な鼻の持ち主で、豪快に鼻を鳴らすことができた。惜しみなく空気を吸いこむことでその思念の公会議を賦活したのち、目をしばたたかせながら、椅子にへたりこんだその賢妻（サジュ・ファム）に近づき、額にうやうやしく口づけすると、一言一言かみしめるように、古代の英雄叙事詩人から霊感を得た口調で、こう言った。

――かわいそうな君！　僕らには僕らの良心という証人がありはしないか？　絶対的なものなんてない、すべ

てを得ることはできない。実際的でなくてはならない、時代とともに歩まなくてはならない、ってことを忘れちゃいけない。それに、結局のところ、人は楽しむために地上にいるわけじゃない。我慢だ！　パリは一日にしてならず、そうとも、でも太陽はみんなのために輝くんだし、少しずつ、鳥は巣を作る……

この日、と詩人は述べている、彼らはそれ以上読み進めなかった。

見ての通り、サント＝ペリーヌ伯爵が最後に妻をなぐさめる言葉は、序言で述べられた、ブルジョワの言語活動は常套句だけで成り立っているというテーゼの（もちろん故意に戯画化した）例証となっている。「人は楽しむために地上にいるのではない」（XV）、「パリは一日で建てられたのではない」（XLIX）、「太陽はみんなのために輝く」（CV）はすでにみたとおりだが、「絶対的なものはない」、「すべてを得ることはできない」、「実際的でなくてはならない」、「時代とともに歩まなくてはならない」も、それぞれ『常套句注解』の中に位置を占めている。独立した鑑賞に耐える各パラグラフが、一書にまとめられるさい、たがいに有機的連関を与えられ、読書の喜びを増す、そのようにして『常套句注解』という書物は書かれている。